

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

キャリア教育の視点に立った生徒指導

著者	堀米 孝尚, 神成 真一
著者(英)	HORIGOME Takahisa, KANNARI Shinichi
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	9
ページ	51-59
発行年	2020-10-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001344/

キャリア教育の視点に立った生徒指導

Student Guidance and Counselling from Career Education Perspective

堀 米 孝 尚*

HORIGOME Takahisa

神 成 真 一*

KANNARI Shinichi

1 はじめに

生徒指導は、児童生徒の自己実現を大きく左右する。児童生徒は、各教科等の授業をはじめ、特別活動・部活動等の様々な教育活動に取り組んでいる。これらの諸活動を通して生き生きと活動し達成感や満足感を得ている。また、仲間と協力したり、学級で団結したり、集団の所属感を高めるなど、相互のかかわり合いや取組みを通して、一生の宝となる人間関係を築いていく。一方、将来に不安を抱え、自分の居場所が感じられないと悩み、目標を見失い、意欲を無くしてしまう児童生徒も少なくない。しかし、誰もが登校することが楽しいと感じ、授業が分かって、できるようになりたいと、よりよい生き方を願っているのも事実である。そこで教師は、児童生徒の願いを受け止め、自己実現を図っていくための、よりよい選択を自己決定できる力を身に付けさせることが求められる。そのためには、児童生徒一人一人に応じた生徒指導をキャリア教育の視点で取り組むことが重要であると考ええる。

2 児童生徒の現状と教師の対応

最近の児童生徒の様子をみると様々な部分でその生活は二極化している。学力や体力等がクローズアップされているが、児童生徒の生活環境や人間関係力・コミュニケーション力の欠如等が学校生活を不安定なものにしている事例もある。例えば、家庭での生活環境や保護者の価値観の多様化は、そのまま子供の学校生活に反映されている。基本的な生活態度が身に付いていない、指導に対する素直さがみられない、結果の勝ち負けにこだわり、人との関わりをうまく築けない、さらに自分を否定的に考える等、その対応や対策に教師は苦慮している。地域性や家庭の経済力、保護者の学校への関心といった教育に対する意識の違いによるところも大きい。生徒指導は時代とともに変化が求められている。一方で、指導する教師側の指導力や使命感、問題意識

* 武蔵野大学教育学部

の二極化も危惧される。教職経験の長短に及ばず、今求められる教育への質的転換や課題解決への取組みが、生徒指導に与える影響は大きい。本年度は小学校が、来年度には中学校で新しい学習指導要領が全面実施される。2030年を生きる児童生徒が、生き生きと時代に対応して活躍できるように、これまでの生徒指導を一步進めることが教師には求められている。

3 生徒指導のこれまでとこれから

生徒指導の取組みやその対応の遅れが問題になるケースは少なくない。その理由は3つあると考える。1つ目は、保護者の子供理解が育っていないことである。「我が子に限って」という認識から生じる「ズレ」である。中学生という時期は、悪いことは許さないとといった善悪の区別はできているが、認識と行動の間に大きな違いがある。孤立を恐れ、「みんなと一緒に」といった考えが、時として集団での行動が大きな影響力を及ぼしている実態がある。2つ目は教員の生徒理解の欠如と、今、目の前（実際には隠れている部分も多いが）で起きている問題行動への「消極的対応」である。問題行動の背景が十分に理解されないまま、状況判断で教師個人が個別に生徒指導に取り組むことである。3つ目は学校・学年の組織力の低下である。生徒指導は複雑化・多様化している。これまでのいわゆるモグラたたきではどうにもならない。目前の問題行動にとらわれるのではなく、管理職を中心に、すべての児童生徒に対して、教師が組織的に、意図的・計画的に取り組む生徒指導が不可欠である。予防的・将来型の生徒指導に転換することが必要である。

児童生徒がどんな生き方を将来に求めているのか、特に、中学生の時期は様々な葛藤と成長の過程を通して模索を繰り返す時期である。教師は、考えを押しつけるのではなく、じっくり考えさせ、「自己実現の鍵」を示していくことが必要である。児童生徒が自己決定の過程で得るものは大きい。

近年、コミュニケーションスキルを生かした生徒指導が行われるようになってきている。コーチングの手法である。教師が児童生徒に問いかけ、それに対して児童生徒が自ら考え、解を見出していくもので、対話を中心とした解決志向的なアプローチである。自分で考えることができない子は、いつまで経っても自立はできない。片山（2018）は、「これからは、生徒指導のスタンスを教師が一方的に指導する問題志向的なものから、児童生徒を主体にして児童生徒自身に考えさせる解決志向的なものに転換していく必要がある」と述べている。こうすることで児童生徒は、自己効力感や自己存在感が育まれる。他者から認められることから、自己有用感が自己肯定感につながり自尊感情を育んでいく。児童生徒が自分で考え、自ら気付いて選択・決定することで、児童生徒は変容していく。

4 求められる生徒指導の考え方・在り方

文部科学省は、教育現場における生徒指導の基本書として、これまでの『生徒指導の手引き』を、およそ30年ぶりに改訂し、平成22年3月に『生徒指導提要』を発行した。

諸富（2013）は生徒指導の概念を『生徒指導提要』から、次のようにまとめている。

- ①生徒指導の目的―「社会の中での個」の成長。「社会的リテラシー」の育成。
- ②生徒指導の対象―「すべての児童生徒」
- ③生徒指導は「重要な機能」を果たすものであること（生徒指導機能論）

- ④生徒指導と学習指導の領域の線引きはできない
- ⑤生徒指導をどこで行うか―「教育課程の内外」において
- ⑥生徒指導の原理とは―「自己指導能力」の育成

『生徒指導提要』では、自己指導能力について「生徒指導の積極的な意義」とし、この「一人一人の生徒の自己指導能力の育成」こそが生徒指導の根本であり、生徒指導全体を貫く指導原理であると述べている。さらに諸富は、今回の『提要』において、ある意味で最も重要な改訂部分は、「社会の形成者」にふさわしい資質や能力の涵養であり、人々が社会のなかで生活し、個々の幸福の実現と社会を発展させていくための包括的・総合的な『社会的リテラシー』の育成を強調している点にあるとしている。

情報化やグローバル化の進展、社会・経済構造の変化に伴い、児童生徒を取り巻く環境は大きく変化している。これらの状況を背景に、問題行動も多様化・複雑化し、取り組むべき課題は山積している。特に、これまでの問題解決的な指導では、児童生徒を取り巻く環境の複雑化や多様化した事象に対応しきれない。

生徒指導提要では、「各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自らが、現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」という生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ育成を図っていくことが求められている。生徒指導イコール問題行動への対応や非行防止といった、治療的生徒指導や指導計画等に基づく予防的生徒指導にとどまるのではなく、児童生徒の個性や長所を伸ばし、自身で問題解決を図り自己選択できる力を育み、積極的に取り組んでいく開発的な生徒指導を意図的・計画的に行っていくことが求められる。その際、①児童生徒に自己存在感を与えること。②共感的に理解し合える人間関係を育成すること。③児童生徒に自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を援助することが重要である。

日々の生活の中で自身に決めさせていくことで、生活を前向きに考えるようになる。学級の中でも、責任を持つと同時に、主体的にかかわるようになる。反対に、教師が一方的に押さえつけたり、自分で決める場面を持てなかった子どもは、例えば将来の進路を決める際もなかなか決めることができず、失敗すると誰かのせいにしたりするようになる。キャリア教育の観点からも、子どもに自分で考えさせる場面を設定することは極めて重要である。

生徒指導は独自に成果を上げるものではなく、キャリア教育との連携、関わりの中でその効果を発揮していくものであると考える。登校時の朝の挨拶にはじまり、始業開始とともに着席したら、正しい姿勢で机に向かい、教師や他の児童生徒の話に耳を傾け、自ら積極的に授業に参加するよう促すのも生徒指導である。教科の授業を通して、獲得した知識や技能をどう活用したら自分や周りの人々が幸せになるのかを想像させるのも生徒指導である。さらに、将来のために、何をすべきか論ずるのも生徒指導であり、自分の生き方や将来の職業等について思いをめぐらすよう示唆するのも生徒指導である。生徒指導は、日常の学校生活において、授業内外であれ、すべての児童生徒に対して日常的に行うことで、キャリア教育の自己実現につながっている。

生徒指導の教育課程上の位置づけは、平成 29 年 3 月告示の小学校（中学校）学習指導要領では、各校種共通して総則に次のように示されている。

総則 第 4 児童（生徒）の発達の支援 1、児童（生徒）を支える指導の充実

(2) 児童（生徒）が自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう、児童（生徒）理解を深め、学習指導と関連付けながら、生徒指導の充実を図ること。

と位置づけられている。これは、すべての児童生徒が将来、社会においてそれぞれ「自己実現」できるよう、また自立できるようサポートしていく教育上の指導のことを指している。

5 キャリア教育と生徒指導

なぜ、生徒指導がキャリア教育の視点に立って進められるべきなのか。キャリア教育とは、一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育のことである。（中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成23年1月31日）

「キャリア教育は、子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである。そして、キャリアの形成にとって重要なのは、自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な能力や態度を身に付けることにある。したがって、キャリア教育は、子ども・若者一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な能力や態度を育てることを目指すものである」としている。（平成23年5月「キャリア教育の手引き」文部科学省）

子供が、社会的・職業的に自立することは、教師・親として誰でも当たり前のように目指すところである。しかし、現実にはなかなか難しいのも事実である。筆者が担当する教師志望の大学生でも、将来いかに生きていくべきか、社会に出る不安や今後の生き方について、定まらないものも少なくない。それに加えて、これからの子供たちには、さらに主体的な生き方が求められる。

平成27（2015）年8月、文部科学省教育課程企画特別部会は、次のような「論点整理」をまとめた。そこには、「2030年の社会と子供たちの未来」に向け、「予測できない未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である」と記されている。また、人工知能はさらに進化し、2045年には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に到達するという指摘もある。

こうした時代を生きるこれからの児童生徒には、ただ伝達された知識から正解を解くというこれまでの正解主義ではなく、様々の情報を主体的に選択し、それらを統合したり、創造する力が必要である。二極化した考えから互いが納得する解を導き出すことができる力、自分で決定し、たくましく生き抜くことができる力が求められる。つまり児童生徒が次から次に生じる課題に対して、主体的に考えられるか否か、他律的ではなく、主体的に人生を選択する力があるか否かが、鍵となる。

「将来何をすればよいのかかわからない」「将来自分は何がしたいのかかわからない」と悩み、切迫感に苛まれ、孤独感と戦いながら、自分は将来どういう形で自立するのか、何によって収入を得て生計を立てていくのか、自分の個性を見極め、進むべき道を自分自身で決める時期が思春期には不可欠であり、それを支援していくのが、キャリア教育であり、児童生徒が様々な関わりや判断で自己決定していく場や機会が生徒指導である。

6 キャリア教育の教育課程上の位置付けと育成を目指す能力

平成 29 年（高等学校は平成 30 年）改訂の学習指導要領では、総則に小学校から高等学校まで一貫した「キャリア教育」が記載されている。このことから、キャリア教育は、教育課程全体にわたり、すべての児童生徒に育成することが求められているといえる。さらに、特別活動において、小中共通に『要』として取扱うこととされている。

小学校（中学校）学習指導要領

第1章総則 第4児童（生徒）の発達の支援 1児童（生徒）の発達を支える指導の充実

（3）児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。

【育成を目指す基礎的・汎用的能力】

人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をするうえでの様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関係を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

文部科学省「キャリア教育の手引き」平成23年5月

7 キャリア教育が目指すもの

平成 30 年 3 月中央教育審議会が「第 3 期教育振興基本計画」について答申した。Ⅲ、「2030 年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」として、個人においては、自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材を育成していくことが重要である。さらに、予測不能な状況の中で問題の核心を把握し、自ら問いを立ててその解決を目指し、多様な人々と協働しながら、様々な資源を組み合わせることで解決に導いていく力が重要である。と記

されている。また、「人生 100 年時代を豊かに生きる」として、今後、生涯に 2 つ、3 つの仕事を持つことや、働きながら、また引退後に、ボランティアにより、地域や社会の課題解決のために活動することなどが一般的になると考えられる。こうしたライフスタイルの中では、若年期において、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の涵養といった資質・能力を身に付けることに加え、人生 100 年時代をより豊かに生きるため、生涯にわたって自ら学習し、自己の能力を高め、働くことや、地域や社会の課題解決のための活動につなげていくことの必要性が一層高まっていく。

さらに、「今後の教育政策に関する基本的な方針」では、具体的な取組みとして、「夢や志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」として、「社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成」をあげ、変化が激しく将来が展望しにくい状況において、社会的・職業的自立を実現するためには、一人一人が自己の生き方や働き方について考えを深め、職業生活や日常生活に必要な知識や技能、技術を主体的に身に付けることが一層重要となる。このため、幼児教育から高等教育までの各学校段階において体系的・系統的なキャリア教育を推進する必要があるとしている。

8 キャリア教育の視点に立った生徒指導（大学生によるアンケート調査結果から）

（1）アンケート調査の分析

筆者が担当する、「特別活動の指導法」の授業で学生約 150 人に「キャリア教育における育成すべき基礎的・汎用的能力とよりよく生きようとする態度の関係」について昨年アンケート調査を実施した。自由記述では、「自分の将来が見通せないことから、そのときの楽しさや偏ったグループを形成するなど、スクール・カーストがいじめの温床になっている。自分の将来がイメージしにくいのは、他者との関わりが少ないこと、個人が極端に尊重され、自己を表現しにくい状況がある。このことから、学校（授業）で話題に取り上げにくいことが要因と考える。もっと、将来がイメージしやすい環境や人材活用、基盤作り等を行うことで、課題解決能力やキャリアプランニング能力も深められる。生涯学び続けることに生きがいを感じられるような学びと生徒指導をコントロールできるようにしていくことが教師に求められる」と女子学生が述べている。人間関係の関わりの中かで、様々な体験を通してキャリア形成が積みれ、よりよく生きていく能力や態度を育んでいくことが記述されている。

調査では、さらに基礎的・汎用的能力の実態について分析した。（調査項目は中学校キャリア教育の手引き参照）全体的にみると、「人間関係形成・社会形成能力」は 90.1%がプラス評価をしている。一方、「自己理解・自己管理能力」は 67.8%と低い。特に、前向きに考える力・主体的行動は、54.9%と低い。女子は、調査項目中最も低く 48.5%である。このことについて学生の一人は、「よりよく生きていくためには、誰よりも自分を大切にすることである。自分はどうしたいのか、どうなりたいのか、を認知し、主体的に行動することができる力が必要である」と述べている。また、「キャリアプランニング能力」では、将来設計・選択ではプラス評価は 65.9%にとどまっている。女子は、57.6%と低い。このことについて学生は、「将来の目標が決まらないと日々の頑張りやモチベーションに影響する」「夢や目標は将来へのよりよい生き方を目指す原動力です」と述べている。さらに、「特別活動において育成を目指す資質・能力について、あなた（強み）に影響を与え

た特別活動と能力の関係について」の調査結果では、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の 3 つの視点について、今日のあなたの人物像（強み）と特に影響を与えた内容について調査した。

調査から、55.8%の学生が、これまでの学校教育の中で生徒会役員や学級委員等、また学校行事等の委員を務めた経験をもっている。また、特に影響を与えた時期として 69.3%が中学校期を挙げ、小学校期を 11.7%が挙げている。最も育成が図られたと感じているのは「人間関係形成」が 71.4%、次いで「自己実現」が 21.1%、「社会参画」が 14.3%である。その内訳を内容別にみると、「学級活動」ではそれぞれ、17.1%、23.8%、29.0%となっている。学生の約65%は、育成を目指す3つの視点を「学校行事」によって育成が図られたと感じている実態が分かった。キャリア教育の要となる特別活動であるが、学級活動が、その機能を十分に果たしているとはいえない実態がみられる。ねらいを明確にした学級活動の実施が求められる。

3 つの視点は、それぞれが独立するものではなく、相互に関わり合って育成が図られるものであるが、児童生徒の実態に応じた「育成を目指す視点」を明らかにした指導計画の作成や実施が重要であることが分かる。特に、中学校は、学級経営の重要性が学習指導要領に新たに記載されたことから考えても、学級活動の適正な実施と充実が極めて重要であるといえる。以上のことから、今後の取組みを考える。

（2）今後の取組み

①キャリア教育を視点とした生徒指導

自己指導能力の育成には、学習指導の場を含む、学校生活のあらゆる機会において生徒指導を実践していくことが必要である。児童生徒に自己指導能力を育成するために、「児童生徒に自己存在感を与えること」「共感的な人間関係を育成すること」「自己決定の場面を与え、自己の可能性の開発を援助すること」の3点をキャリア教育の視点に立って意図的・計画的に取り組むことである。自校の求める生徒像を明確にし、キャリア教育全体計画と合わせた3年間の見通しをもった生徒指導のマトリックスを作成することが効果的である。キャリア教育で育成を目指す「基礎的・汎用的能力と各能力における要素」との関わりで教育活動を見てみることだ。特に学級活動における「一人一人のキャリア形成と自己実現」の時間の指導を特別活動全体計画との関わりで実施することである。さらに、ポートフォリオ等の記録にとどめることで自己理解と変容が明らかになることで達成感や主体的行動につながる。

②児童生徒の自己決定を援助する学級経営

調査から、「自己指導能力と特別活動を通して身に付けた能力」について複数回答した結果、「共感的な人間関係を育成すること」や「児童生徒に自己存在感を与えること」が、学校行事や学級活動・生徒会活動を通して育成されているのに対して、「自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」については十分に行われていない。その結果、課題解決力・積極性や判断力が身に付いていないことがわかった。そこで、学級活動を核に学級経営のなかで、①意思決定とそれに基づく実践力、②社会性や責任・役割の実行、③粘り強さ等の自己実現に必要な能力が身に付く活動を行うことが必要である。

具体的には、日々の教育活動のなかで、○児童生徒自身が考える時間・自己決定させる場の設定、○児童生徒の可能性や期待感を育む教師の言葉かけ、○児童生徒の目標設定の工夫、○学級での話

し合いのルール作り等の取組みを実施することである。

③日々の教育活動における自己指導能力の育成

かつて、カリスマ的な教師が担当する生徒指導は、その教師が異動することで生徒と教師の力関係は逆転し、学校の荒廃を招いてきた経緯がある。すでに、指示・命令・恫喝的な生徒指導では、将来において社会的に自己実現ができるような資質・能力を身に付けていくことはできない。児童生徒一人一人に応じた、キャリア教育の視点に立った自己の可能性を開発する生徒指導が必要である。そのためには、まずは、当たり前のことを如何に地道に丁寧に取り組むかが要となる。例えば、以下のような取組みが考えられる。

- 教師自身が授業を大切にしている。時間を守ることは教師から率先して、授業の開始や終業の時間が守られている。
- 師弟動向を励行している。児童生徒の活動を認める時間、目立たない児童生徒への言葉かけを意図的に行っている。褒めるは教師の尺度、認めるは児童生徒の尺度で。
- 児童生徒に任せて見守る姿勢で、「ありがとう」の一言が児童生徒は自己存在感と自己有用感を育む。
- 「どうせ・・・」「どうしても・・・」という言葉から成果は生まれない。「どうにかして・・・」と意欲や期待感につながる自己決定を。
- 常に児童生徒の期待感を大切に、目標設定を工夫させる。「自分にもやれそうだ」と感じさせる内発的動機付けにつながる課題を。
- 結果の違いを生み出す経過の違いをみられる指導者に。
大切なことは、全ての教師が取り組める指導や活動にこそ児童生徒の育成が図られる。

9 まとめ

キャリア教育が、もちろん、将来の職業について考え、取り上げることは必要なことであるが、職業に就くことが最終ゴールではない。社会で自立していくために必要な資質や能力を発達段階に応じて、児童生徒自らが身に付けていくことや、活動を通して、自己の存在感を感じ、将来、社会に貢献していこうとする意欲や態度を育んでいくことを『新しい学習指導要領』では求めている。このことは、生徒指導における『自己指導能力』の育成に深く関わっているといえる。不透明な時代を生きる子供たちにとって、いかに生きるかという課題は、小学校から高等学校まで体系的な指導が求められる。そして、学校の教育活動全体にわたって行われることが必要である。今後ますます、児童生徒が自ら自己決定し、人間関係力を身に付け、自己実現を図りながら、よりよく生きていこうとする生徒指導の実現には、キャリア教育の視点に立って指導・育成することが重要である。

【引用・参考文献】

- 生徒・進路指導の理論と方法（2019）工藤 亘・藤平 敦
生徒指導・進路指導・キャリア教育論（2019）横山明子
2020 年からの新しい学力（2019）石川一郎
三訂版 入門生徒指導（2018）片山紀子
キャリア教育のウソ（2018）児美川孝一郎
新しい生徒指導の手引き（2013）諸富祥彦
生徒指導提要（平成 22 年 3 月）文部科学省
生徒指導を理解する～「生徒指導提要」入門～（平成 23 年 3 月）滝充 国立教育政策研究所
中学校キャリア教育の手引き（平成 23 年 5 月）文部科学省
データが示すキャリア教育が促す「学習意欲」(平成 26 年 3 月) 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・
進路指導研究センター
第 3 期教育振興基本計画（答申）（平成 30 年 3 月）中央教育審議会
小学校学習指導要領・解説総則編（平成 29 年 7 月）文部科学省
中学校学習指導要領・解説総則編（平成 29 年 7 月）文部科学省
高等学校学習指導要領・解説総則編（平成 30 年 7 月）文部科学省
中学校学習指導要領解説特別活動編（平成 29 年 7 月）文部科学省